



自分の生家を知る



koberyol

東京はアメリカによる空襲に遭い、焼土と化し、多くの人々が殺傷された。それでも父は東京で仕事をしなければならない。母は空襲が激しくなる前に、青森県は弘前市の郊外、清水村という母の実家のあるところへと疎開していた。

当時のわたしはといえば、旧日本海軍にいた。

901空に所属し、「八勝園」という宍道湖の湖畔にある旅館を兵舎にし、湖上の零式水上機二機とともに日本海におけるアメリカの対潜水艦の侵入警戒を任務としていたのである。

もっとも、ここでのわたしの任務は哨戒などという華々しいものではなく、天気予報を受信する、または本部からの電信を受信することを毎日の日課とし、業務に懸命であった。

だが、そんな日々も終わりをむかえる。戦争が終結したのだ。

忘れもしない8月15日、昭和天皇の詔勅（しょうちよく）をもって武装解除したあと、わたしは十八歳で海軍二等飛行兵曹に昇進した。

戦争が終わると同時に昇進するとはまったくもって無意味だが、自衛隊にでもあとあと入隊すれば、もしかしたら役に立ったかもしれない。

しかし、わたしは糸の切れた凧になり、目標を失った。自分の進路をどうすべきか決めかねていた。とりあえず、青森県の母の実家をたずねることにした。

昭和20年8月、終戦直後の東京に食料はなく、多くの人々は近隣の埼玉、千葉、茨木、栃木と農家をたずね歩き、米、芋など食べものを確保するのが日課であったが、その点、母の実家では食べものに困ることはなかった。

そして終戦の年の9月から昭和22年の10月まで、青森県弘前市常盤坂の母方の実家において林檎畑の作業、稲作の作業を手伝った。

その後、サラリーマン生活を送り、いま齢八十になってもトマトをはじめとした作物をセミプロ並みの手際で育て、収穫できるのも、この約二年間の農作業の体験が生きているからである。

話を戻そう。

さて、弘前は雪解けとともに春がくる。桜と梅と桃、そして林檎がいつせいに花を綻ばす。何とも豊かな津軽の風情と人情はここから生まれている。

弘前市は青森市につぐ中心都市である。

良質の米と、つやつやとした良い林檎を産する土地である。

林檎畑からみる岩木山の眺めは、津軽平野の代表的な風景で、津軽富士の名で親しまれる津軽のシンボルが眼前にひろがる。そこでの当時の農作業を思いだす。農協から入手した肥料は、おもに生魚を腐らせたものだから、それはそれは異臭がひどいものだから、マスクを着用しながら農作業に従事したものだ。

林檎は花が咲いてから花粉を受粉させ、小さな実がついたら袋かけをした。

農作業に必要な馬の世話をしたり、精米所での脱穀、雪かきはもちろんのこと、求められていることは何でもやった。当時、弟は弘前工業高校に入寮して、土曜、日曜日には時折、帰って

きた。

ここでわたしが出生した家についてもふれてみたい。

母の説明によれば、生家は弘前市内は西茂町の茅葺き屋根の家だという。

戦争が終わった当時、十八歳であったわたしは母の実家にいて、先にもいったように農業の手伝いなどをしていたが、自分の生まれた家を見に行った。

いま、思いを過去に飛ばし、脳裏に蘇るのは、寺町が道路一本むこうでひろがる品格のある界限であった。寺町は古めかしい白壁がつづき、杉の木立が外の参道からみることができた。物音一つしないような静かな界限で、誰にも知らせずに、そっとそのままにしておきたい風景が残っている。

すでに生家は人手に渡っていた。

あらためてみれば、やはりまったく田舎風の茅葺き屋根の家屋である。

それからは弘前市にでるときは必ず、この生家のまえを通るようにした。

生まれた家はいま、どうなっているのだろう、と折りにふれ、思うことがあるが、あれからもう六十年以上の歳月が流れたのだ……。

津軽の冬は、雪が降りだすと、六ヶ月ものあいだ雪の中にいるのも同然だった。したがって冬は途方もなく長く感じられる。暖は炉端に集まり、家族は火を囲んだ炉端中心の生活になる。炉端とは、囲炉裏（部屋の床を四角に切り抜いたところで火を熾し、防寒用や煮炊き用にする）である。

これは母から聞いた話である。

一年と六ヶ月だったわたしは祖父の抱かれ、囲炉裏のそばにいた。わたしが激しく泣くので、どうしたのだろうと見たところ、金属製の火箸がわたしの右腿にふれていたのだった。いまでもわたしの右腿に火箸による「やけど」のあとが残っている。

どれほど熱かったかは記憶にないが、父方の祖父はわたしに炭火による暖を与えようとした行動が仇になったようだ。

その後、やけどは無事、治ったようだ。

やがてその頃、東京で単身赴任のような生活をしていた父が母とわたしを迎えにきた。わたしは二歳にして東北本線で上京することになった。車中では十余時間は泣きっぱなしで上野駅に着いたというから、困った赤ちゃんだったようだ。